

『捻くれ私の曲がり角、僕の三秒の幸福』

一時間も早く目覚ましをセットして、寝癖を直すのにも時間かける。その割に朝ご飯は軽く済ませて、自転車なのに学校までわざわざ遠回りをして、そのほか、たくさんの頑張りを乗り越えた先に僕の幸福はあった。

わずか、三秒の幸福。

彼女にとってはなんでもないただのすれ違いが、僕にとってはすべてだった。

もうすぐ見える曲がり角を左にいけば、僕は何も考えられなくなる。理屈っぽいこの頭は働かず、一瞬の中に映る彼女の姿を記憶することで必死になる。

考えるだけ無駄だ。曖昧な埋め合わせをするぐらいなら、いつそのこと「わからない」と一言で済ませたい。

他校の制服に身を包まれた姿に心がくすぐられる。風になびいた黒い艶やかな長髪に自転車の重心がぶれる。挨拶だけだけど、返してくれるときの控えめな笑顔で、今日の僕は誰よりも運が良くなるんだ。いつか、ちゃんと話しかけたい。

『あつ、おはよう！』

私の上擦った声と、彼の細く澄んだ声とが重なるその瞬間、すごく嬉しいような、すごく恥ずかしいような。早起きをして、わざわざ遠回りをした甲斐があったとだけ思い、自分の顔が赤くなっていないかを触れて確かめ、胸の内が熱くなる。

それでもやっぱり恥ずかしさが勝って、後ろ姿の彼に振り向き、こっそり目で追いかける。捻れた私でごめんなさい。

彼には何でもないことなのに、勝手に謝ってみたりして。この些細な出逢いに、どうしてこんなにも心動かされたのか、それは色が複雑に絡み合っているようではつきりしない。でも、これぐらいが好きだった。

一日に声を出すのが、彼に挨拶するときぐらいだから、その嬉しさに溺れて勘違いをしているだけなのかも。けど、それなら私はずっと勘違いの海に溺れていよう。感情に身を捧げ燃焼しつつ、水の自然な冷たさが、まだ私を冷静に保っている。この矛盾をどうでもいいことと浮かして。

叶わないと思うからこそ、締め付けられるこの想い。いつか、話しかけてほしい。

捻くれ私の曲がり角、僕の三秒の幸福

2025 年 4 月 20 日 執筆

著 者 やさかれない
八 坂 零

掲 載 芸術の星座
